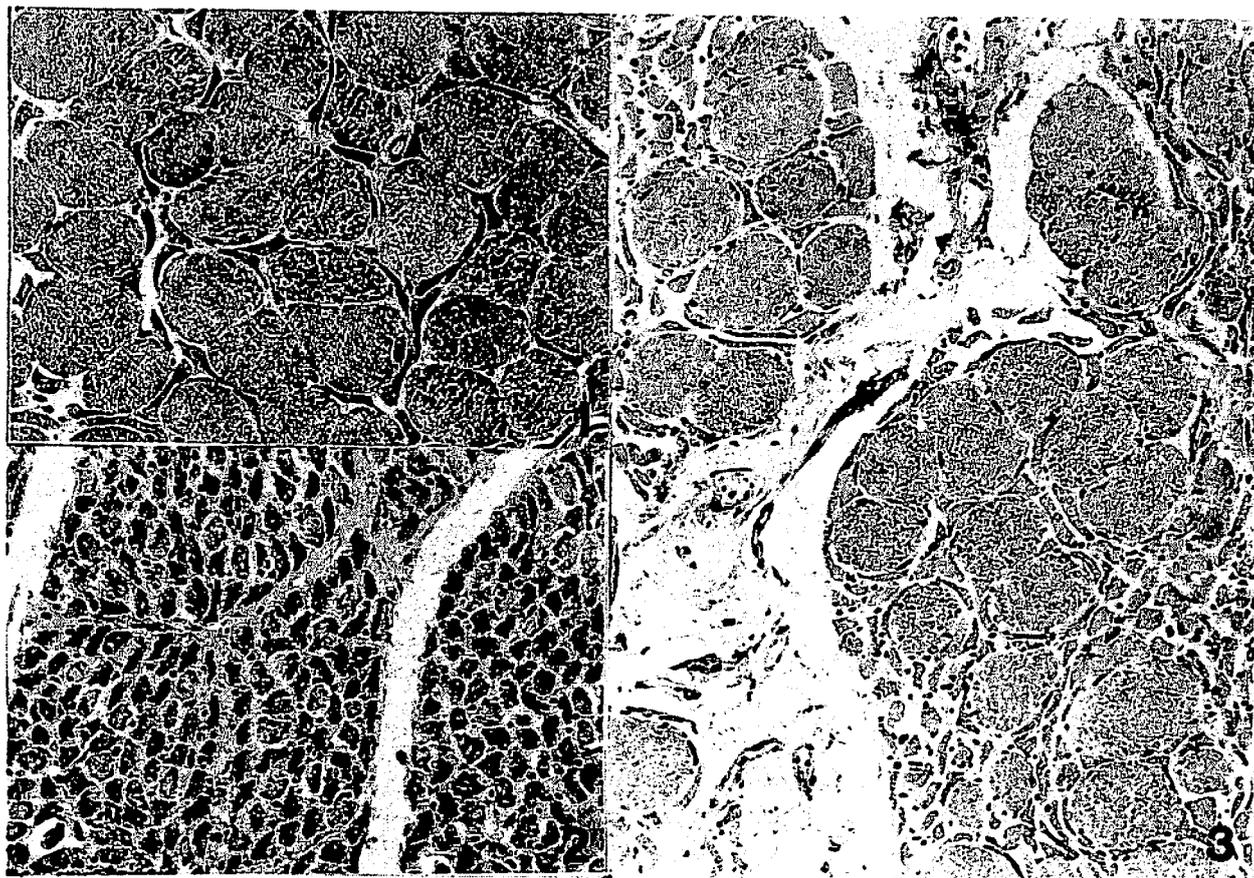


ウマの筋肉

帯広畜産大学畜産学部家畜病理学教室出題 第28回獣医病理学研修会標本No.498



動物：ウマ，サラブレッド種，雌，3歳。

臨床事項その他：2ヵ月前より左前肢に跛行（支柱跛）を生じ，肩甲上神経麻痺と診断され加療されてきたが，肩甲棘下部の体表において陥凹が顕著となり昭和62年6月上旬予後不良として廃用となった。廃用時，肩甲棘下陥凹部に認められた菲薄化した三角筋及び棘下筋が採材され，ホルマリン固定され当教室に送付された。

組織所見：ほぼ正常な径を有する筋線維間に散在性に角ばった小径化筋線維が認められる部位（写真1，HE染色，×160）と，ほぼ均一な大きさの小径化線維が集団を形成する部位（写真2，HE染色，×160）

及びその両者が混在する部位（写真3，HE染色，×160）が認められた。しかし，筋線維の変性変化や間質の変化は認められなかった。

考察及び診断：本例はホルマリン固定材料しか入手できなかったため組織化学的検索は行われず，筋線維型を識別して検索することはできなかったが，散在性の小径化筋線維は，脱神経支配による選択的な筋線維の萎縮を，小径化筋線維の集団は再神経支配後の再脱神経支配によるGroup atrophyを示すものと考えられ，提出標本は典型的な神経原性筋萎縮の像と思われた。以上，診断は肩甲上神経麻痺による神経原性筋萎縮とした。